

登録医ニュース

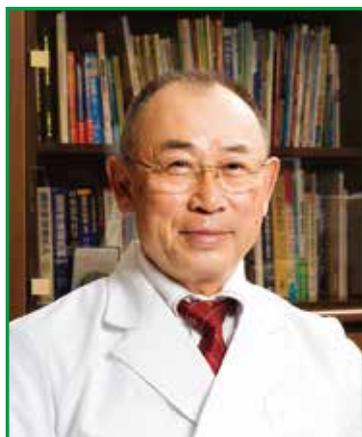
メタセコイア

第53号
2021.1

編集・発行/東北医科薬科大学病院 患者支援・医療連携センター

〒983-8512 宮城県仙台市宮城野区福室1丁目12番1号 Tel(022)259-1221(代表)
Tel(022)388-9593(医療連携室直通) Fax(0120)25-9121(医療連携室直通)
Eメールrenkei@hosp.tohoku-mpu.ac.jp ホームページhttp://www.hosp.tohoku-mpu.ac.jp

新年のあいさつ



病院長 ^{こんどう}近藤 ^{たかし}丘

明けましておめでとうございます。皆様におかれましてはつつがなく新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

本年は東北医科薬科大学が医学部を開設して6年目の最終年度を迎え、医学部学生が1年生から6年生まで揃うこととなります。東北医科薬科大学病院も大学病院として6年目を迎え、昨年9月から600床の病院となり、勤務する医師もこの4月から臨床研修医も加えて220人を超える数になる見込みです。大学病院となり病院の規模が拡大するとともに、救急体制も強化し、平成26年度に年間2117件であった救急車の受け入れ件数が昨年度は3699件と1000件以上増加し、地域医療への貢献度を高め

てまいりました。今後はさらに三次救急も担えるような体制を整えるべくさらなる強化に努めてまいります。一方、平成27年度には年間1440件であった全身麻酔下での手術件数は昨年度には2503件となり、今年度はさらに増加する見込みです。また件数だけではなく、その内容も進化しつつあり、ロボット支援下での胃癌手術やカテーテル下に大動脈弁を留置するTAVIの導入など、高難度の手術による先進的な医療の実践が可能となっております。また、昨年度からは産科分娩や血液内科の診療も開始されてこれまで以上に幅広い診療体制が構築されました。このように大きく成長した診療体制を登録医の皆様により一層ご利用していただくべく、今後さまざまな体制の見直しを行いつつ、順次改善に努めてまいります所存です。

昨年は、ほぼまるまる1年間、新型コロナウイルス感染症への対応に追われた年でしたが、宮城県や仙台市保健所との緊密な連携のもと、本院もその診療に大いに力を尽くしてまいりました。本院は一昨年に完成した新館以外は東北厚生年金時代からの建物で、窓口やロビー、外来などは建設当初の350床規模の病院のものそのまま600床規模の病院となった今では大変狭隘なものとなっています。加えて、さらに新型コロナウイルス感染症による院内感染防止のための対策を講じなくてはならず、今しばらくは本院を受診される方に大変ご不便をおかけすることになりますが、一旦院内感染が発生しますと診療業務に甚大な支障をきたしますので、その防止が最優先課題であるをご理解いただければと思います。新型コロナウイルス感染症は社会に大きなマイナスの影響を及ぼしましたが、約1年間職員一丸となってこの感染症への対策を立ててきたおかげで、多くの職員に感染症対策のノウハウという貴重な経験が蓄積され、それによって一回り大きな安全安心な診療の実践が可能になったと考えております。新型コロナウイルス感染症がいつ終息するか見通せないところもありますが、それに屈しない体制を整えて地域医療のために貢献してまいりたいと存じますので、本年も登録医の皆様に変わらぬご支援をいただきますよう、何卒宜しく願いいたします。

周産期診療のさらなる展開を目指して

産婦人科 科長 渡部 洋
産婦人科（産科診療担当） 酒井 啓治

東北医科薬科大学開設と共に婦人科腫瘍を主体とした診療を開始以来、宮城県のみならず東北地方全域および関東地方からも多くのご紹介を頂き、医員一同ご期待に添える産婦人科医療の提供に向けて日々努力致しております。

近年は出生率の減少が社会的な問題になっていますが、医学生の産婦人科希望者の減少ならびに現役産婦人科医師の高齢化のため、依然として「産科医療危機」が叫ばれています。宮城県の産科医療も分娩取扱い病院の集約化などによる効率的な分娩体制提供のための努力が続けられていますが、産科医療過疎地域の解消は大きな課題となっています。当院でも前身の東北厚生年金病院時代に分娩取扱いが中止されましたが、東北医科薬科大学病院開設と同時に分娩棟ならびに産科外来の新設計画に着手し、令和元年（2019年）11月から産科診療および分娩取扱いを開始致しました。第1例目は帝王切開による分娩でしたが、これまで約70名の新生児が無事に元気な産声をあげています。また、産科医療再開に伴って、小児科ならびに麻酔科を始めとする院内診療科のみならず、東北大学病院、宮城県立こども病院ならびに仙台赤十字病院との密接な連携体制を構築し、安全かつ満足度の高い分娩管理体制の実現を目指して参りました。

少子化の進む現在、分娩は女性の生涯で極めて大きいイベントであることは間違いありません。当院の分娩棟は産婦人科外来と同じ本館2階にあり、家族との同室が可能なLDR対応分娩室を2室備え、さらに新病棟5階にある産婦人科病棟の産科専用病室は、全室シャワー、トイレ付の個室と致しました。さらに、本年4月から2名の女性産婦人科専門医が仲間に加わり、女性の視点から見たより細やかな妊婦対応を目標に、定期的な助産師・看護師とのカンファレンスを行い、多様化する妊婦さんのニーズに応えられる産科医療体制の充実化を進めています。

今後とも地域医療に携わる先生方のご要望にお応えできるよう努力致して参りますので、当院の周産期医療のさらなる展開にさらなるご協力を頂きますよう宜しくお願い申し上げます。



左から 村岡由真 渡部 洋 松澤由記子
中西 透 酒井啓治



産科スタッフ

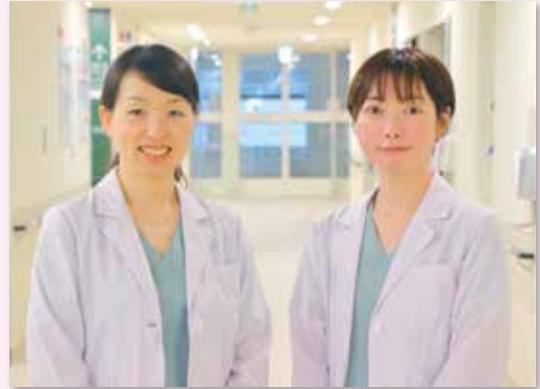


●産科人科に女性医師が入職しました

令和2(2020)4月に東北医科薬科大学に女性医師2名(写真)が赴任し、産婦人科診療に携わっています。

当院では令和元年(2019年)11月から分娩が再開し、現在15名の助産師とともに診療を行っています。分娩の再開から今年8月までに52名の方が無事に出産されました。大学病院であることから、内科疾患や精神科疾患などの基礎疾患合併の方も多く、それぞれの主治医の先生方と協力し無事に出産を迎えることができるよう取り組んでいます。

現在、当院で分娩が可能な週数が妊娠35週以降となるため、妊娠35週未満での分娩が見込まれる方や胎児の精密検査が必要な方などに関しては近隣の分娩施設のご紹介をさせて頂き、安全に出産して頂けるよう体制を整えています。



産婦人科
松澤由記子 村岡由真



5N病棟 母児同室となる個室



分娩後は入院中に一度、お祝いの気持ちを込めて『お祝い膳』を提供させて頂いています。

【予約について】

- ・産科外来は完全予約制です。
- ・分娩予定日が決まっていない方の分娩予約はできません。
- ・予約は医療機関からお願いいたします。
- ・「産科診療予約申込書」に必ず分娩予定日と週数を記載の上、患者支援・医療連携センター(医療連携室)までFAXにて送信ください。
- ・受診予約はあくまで外来受診であり、分娩予約ではありません。分娩の予約は医師の診察を受けてからになりますのでご了承ください。
- ・合併症妊娠や多胎妊娠などハイリスク妊娠、早産の可能性が高い妊娠と判断した場合は初診時および健診経過中に他の専門医療施設へご紹介させていただく場合がございますのでご了承ください。
- ・里帰り分娩も予約が必要です。

【予約FAX 申込先】

患者支援・医療連携センター(医療連携室) FAX: 0120-25-9121(直通)

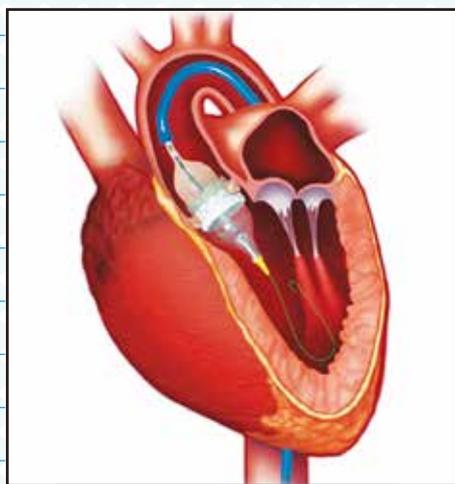


経カテーテル的大動脈弁置換術(TAVI)の 当院での開始について

循環器内科 小丸 達也
心臓血管外科 川本 俊輔

平素は当院の診療にご協力いただき誠にありがとうございます。

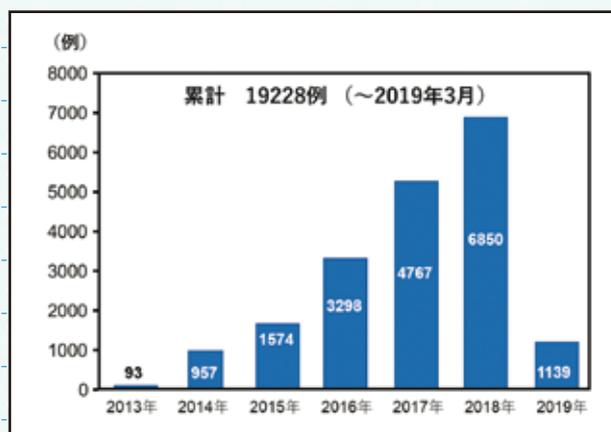
さて、このたび当院が経カテーテル的大動脈弁置換術(TAVI)の実施施設に認定され、この9月に治療が開始されましたことをご報告申し上げます。



高齢化と共に大動脈弁狭窄症の患者数は増加しております。この疾患に対する薬物治療には限界があり、根治的治療としては主に外科的大動脈弁置換術が選択されてまいりました。しかし大きな手術だけに年齢や合併症のために手術を断念せざるを得ない症例も少なからずございました。近年、TAVIによる治療法が確立し、大動脈弁狭窄症の治療法は大きく変化しております。PARTNER 研究などの国際的な大規模試験においてTAVIの有用性が証明され、下図のように我が国においてもめざましい勢いでTAVIの症例数が増加しています。特に高齢者や開胸手術のリスクの高い患者などに対しては積極的にTAVI

を選択するようになっております。当施設といたしましては、このような状況を踏まえ、循環器内科と心臓血管外科がタイアップして、TAVI実施に向けて準備を進めてまいりました。そして2020年8月に実施施設に認定され、9月に第1例を無事実施できたところでございます。

今後この治療法を根付かせて、大動脈弁狭窄症の患者さんの生命予後改善、QOL改善に役立てたいと思っております。つきましては、貴施設におきまして、大動脈弁狭窄症の患者さんがおられましたら、是非当院にご紹介いただき、TAVIを含めた治療法の選択について検討させていただければ幸いです。何卒よろしくお願い申し上げます。



我が国におけるTAVI施行例数の年次推移
(2013年10月~2019年3月)
(田村俊寛 Cardiac Practice 30(3);
2019:175-179. より改変して掲載)